
ぼくが王になったのは

note

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくが王になったのは

【Nコード】

N5326N

【作者名】

note

【あらすじ】

農家の息子だったセダントは王の影武者に抜擢された。幸運だと思ったのもつかのま。ディアエルと名乗る褐色人種の護衛少女は危険が迫っていることをセダントに伝える。

第1章 少年時代の終わり（1）

太陽はちょうど真上に位置していた。その光を鎧に反射させ、異なる陣営が砂塵を舞い上がらせて激突する。あつという間に双方の先頭集団が沈んでいった。鈍く光を反射させる剣や鎧が、意思を持たない人形を動かしているかのようなだった。怒号と剣戟の音がこだまし、それが場に異様な興奮をもたらしている。

シエルヘンナは後方の馬上からそれを眺めていた。戦況はやや不利に思えた。明らかに自軍は敵の突撃力にひるんでいて、それがさらに敵の強い猛攻を招いている。シエルヘンナは声をひそめて進言した。

「陛下、少し下がりました」

横の白馬に乗っている少年は不満げな声をもらす。

「ここで下がれば余計に士気の低下を招く。それでは駄目だ」

「ですが、いずれここまで押されるでしょう。矢というのは時として恐るべき距離を飛ぶのです」

「分かった。そうしよう」

「ウェリオン陛下、こちらへ」

若きウェリオン王は不満げに馬を下がらせた。シエルヘンナは矢継ぎ早に伝令兵に指示を飛ばす。

「被害が増える前に下がれ」

「はい閣下」

伝令が飛ぶように走って行くのを確認すると、シエルヘンナはため息をついた。

「陛下には後継ぎがないのです。危険な真似はしないでください」

「影武者が見つかったんだろう？ それなら戦争に出るのは今回が最後だ。少しぐらい遊んでも良いじゃないか」

「まだ雇ってはいません。他により最適な者がいるかもしれませんから」

「そうか。会ってみたいものだな。どのくらい似ている？」

「顔立ちは陛下そっくりですね。髪色も同じブロンドですが、もちろん陛下の鮮やかさには及びません。身長は陛下より少し低く、年齢もひとつ年下です」

「お前がそう言うなら大丈夫だな」

ウエリオン王の興味は戦場に戻ったようだった。敵の騎兵隊が囲むように左右に広がってきている。それに対応するように自軍も広がりがつあった。シエルヘンナは戦場から目をそらす。ウエリオン王が戦況を判断できているとは思えない。

「戦闘中止して撤退しましょう。これ以上戦っても利益はありません」

「何故だ。我が軍は下がってこそいるが……」

ウエリオン王は思わず言葉を切った。敵の突撃兵が一点突破をしてきたのだ。その一点を中心に瓦解していき混乱が広がっていく。二点、三点と敵の突撃兵が侵入してきて乱戦へと繋がりはじめた。一度侵入されると、その周辺は即座に敵の後続に飲み込まれていく。前線が完全に崩壊していた。

「撤退だ！ 弓兵は援護しろ！ 弓兵以外は無駄な応戦をするな！」
シエルヘンナは叫び、ウエリオン王を伴って全力で馬を走らせた。瓦解した前線の兵たちの悲鳴が耳を打った。数と力に任せた轢き殺しだった。

ウエリオンの顔は青ざめていた。敵と互角であると思い込んでいたのだらう。それが間違いだと知って動揺しているのだ。ウエリオン王はわずか十七歳だった。父の死後即位したが、賢明な王であるとは言えない。虚勢を張ることは出来ても、いつだって中身などなかった。シエルヘンナは彼が愚王になるだろうとさえ考えていた。

「右側から敵の小隊がまわり込んでいます！」

後続の兵士が悲鳴に近い叫びを上げた。林の中に敵の姿がおぼろげに見えた。シエルヘンナが行動するより前に、敵の弓が数多のうなりを上げる。白馬の嘶きがそれに追隨して響き渡った。

セダントは家名さえ持たない農家の息子だった。十六歳になった彼は本格的に家業に取り掛かり、ひどい腰痛に悩まされていた。彼の父は腰痛はまだ働ける証拠だと言ってはばからなかった。痛みは神の与える苦勞に対する見返りである。痛みを感じなくなった時こそ、真に危険なのだと教えた。セダントは特に神の見返りが欲しいとは感じなかったため、仕事の手を抜くことを覚えた。呆れた父は労働の報酬として時々休暇を与えることにした。

セダントはその休暇中だった。酒場で友人らと飲むのが彼の休暇の使い方だ。やや古びた小さな酒場では、昼間から十名ほどが飲んでいた。

「そういえば、ウエリオン陛下が戦場で怪我をしたって話知ってるか？」

栗毛のアントンが真面目ぶった顔で話していた。彼の話の多くは面白いわけではなかったが、話題の豊かさから暇をつぶすのには最適だった。

「怪我？ 落馬でもしたの？」

セダントは眉をひそめて聞き返した。

「矢で撃たれたらしい。死んだって噂もある。もし死んでたら大変だな。まだ後継ぎいないだろう？ そうしたら兄弟間の醜い後継者争いが始まるわけだ。食材を買い占めた方が良いかもな。高く売れるぞ」

「死んでなかったら大損じゃないか。そんな博打は出来ないな」

「そんなこと無いさ。今はただでさえ戦争中なんだ。どんどん物価は上がっていくに決まってる」

アントンはグラスを置くと深く息を吐いた。

「ここだけの話、戦争は負けそうなんだと。冗談じゃ無くて色々買い占めた方が良いかもな。お前の家は農家だからある程度確保できるかもしれないけどさ、俺の家織物屋だろ。不安なんだよ」

「僕の家だつてトウモロコシしか作つてないよ。ずっとトウモロコシは嫌だな」

アントンが口を開こうとした時、酒屋の扉が音を立てた。小気味良い鈴の音が店内に広がる。反射的にそちらを見たセダントは目を細めた。

入ってきたのは軽鎧に身をかためた褐色人種の女だった。女は店内を見渡し、セダントと目が合うと足音を立てて歩み寄ってきた。

「何だあれ」

アントンがささやく。セダントはそれを無視して褐色肌の女を見上げた。

「セダントか」

女の声は低く威圧的でこそあったが、けんか腰ではなかった。セダントは機械的に頷き女を観察した。肌よりも色の薄い銀髪を後ろで結いあげている。筋肉質の腕、質の良い服。あまり関わりたくないと思える相手ではなかった。この国では褐色人種でまともな仕事についている者は少ない。

「少し二人で話をしたい。構わないか」

女が横のアントンにちらりと目を向けると、アントンは体を縮ませて目を背けた。

「ぼくに？ 良いですけど……」

セダントは警戒しながら立ち上がった。アントンは心配そうな目を向けたが何も言わない。セダントは女の後に続いて外に出た。太陽が眩しかった。

「お願いがある」

お願いというのは多くが否応になく任されるものだ。セダントは顔をしかめた。

「仕事の依頼だ。王宮に来ていただきたい。報酬は思うままに出そう」

「どんな仕事ですか？ 何か勘違いされてるかもしれませんが、ぼくはただの農民ですよ」

「影武者をしてもらいたい」

男は声をひそめて注意深く答えた。セダントは目を丸くする。

「影武者？ 誰の？」

「ウエリオン陛下の」

アントンの話を思い出した。ウエリオン陛下が戦場で負傷したと。「陛下は負傷している。しばらくは安静にしなければならない。もちろん警備は厳重だが、その間にあなたが影武者になることでより安全になる」

「いや、そろそろトウモロコシの収穫時期なんだ。だから断りたいなっと思っんですけど」

「勅命だ」

「何だつて？」

「断ることは出来ない。あなたには影武者をしていただく」

女の顔がけわしくなった。セダントは女が本物の王宮の使者なのだと思い、血の気が引くのを感じた。勅命を偽る行動は死刑に値するからだ。

「家族には留学することになったとでも伝えろ。明日には出発しないと」

「留学？ 何の？」

「農業留学とでも言えば良い」

「めちゃくちゃだ」

「理由は何でも良いんだ。死んだことにしても良い。とにかく、明日には怪しまれないように出発しろ。馬はこちらで手配する」

呆然とするセダントの肩に雫が落ちた。見上げると暗雲が涙を流していた。

神殿に革靴の音が響く。足音の主であるシェルヘンナは窓の外を見て目を細めた。

「雨か」

次第に雨が地面をたたく音も聞こえ始めた。そのまま足を止めて外を眺めていたが、不意にかけられた言葉にシエルヘンナは我に返った。

「シエル、ここにいたのか」

やや肥満体形の中年の男が顔をしかめて近づいてきた。それがヤーヘックだと気付くのに少しばかり時間がかかり、シエルヘンナは自身の老眼がひどくなっていることを知った。

「何か用か」

「とぼけないでくれ。何のつもりだ。説明してもらいたい」

「何を？」

「陛下のことだ！ 火葬を指示しただろう。大罪だ！」

ヤーヘックは口髭をなでつけながら睨みつける。彼持ち前の愛嬌の良い顔は今、歪んでいた。

「あれは影武者だ」

「なんだって？」

「影武者が死んだ。それだけのことだ」

「いつの間に入れ替わった？ まだ見つかっていなかったんじゃないのか」

「死んだのは、ただの影武者だ」

にやりと笑うシエルヘンナをヤーヘックは呆けた顔で見つめていたが、その真意に気づいて顔を真っ赤に染めた。

「馬鹿な！ シエル、君は何を考えているんだ！」

「新しい陛下は明日には来るさ。それで良い」

「ばれたらただじゃ済まないぞ。今度ばかりは同じ船には乗れない。まさか、陛下が死んだのは君の……」

「それは違う。あれは不運な事故だ。だが、考えても見る。我々の前に横たわる問題の数々を。それがこれだけで解決出来る」

「これは解決じゃなくて解決の先延ばしだ」

「すぐに解決させるさ。もう子守の必要もなくなった。協力してく

れるだろう?」

「考えさせてくれ。頭がおかしくなりそうだ」

ヤーヘックは顔を大袈裟にしかめて去っていった。雨音だけがシエルヘンナの耳を打った。

第1章 少年時代の終わり（2）

褐色人種の女はディアエルと名乗った。宣言通りに翌日に彼女は現れて、宮へとセダンタを招き入れた。

「あの、まだですか？」

「もうすぐだ」

セダンタは頭に大きな布袋をかぶせられていた。当然前方も見えない。両手を縄で縛れて、ディアエルに引っ張られながら歩いている。影武者として動く前に顔を見られてはいけならしい。

「これだと、ぼくが犯罪者みたいに見えない？」

「そう見えるようにしている」

「ああ、そうなんだ……」

セダンタのこうべが垂れた。そのまま彼女はセダンタを連れまわし宮の一室へ入った。ようやく頭を覆っていた布袋から解放される。セダンタの目にまず飛び込んできたのは豪華な内装だった。少年は壁紙なるものを見たのも初めてだったし、装飾のためだけに作られた置物を見たのも初めてだった。ベッドの天蓋とそれを支える柱を見つめながら、セダンタはゆっくりたずねた。

「どこなの？ ここ」

「お前の寝室だ。特に用が無い時はここに閉じ込めてもらう」

「寝室？ これが？ 大きすぎるんじゃないの？」

「大きすぎても問題ないだろう。服はそのクローゼットに入っている。さっさと着替える」

クローゼットには浮世離れた服が大量に入っていた。村では見たことがないような色彩だった。

「すごいセンスだね」

「そうだな」

ディアエルは部屋から出て行こうとはしない。セダンタは少し迷ってから適当に服を一着選び、そのままそくさと着替えた。ディ

アエルは表情ひとつ変えない。

着替え終わったセダントは鏡を見て顔をしかめた。困惑顔の間抜けが鏡に映っているのだ。そして、多分それが自分であることに気付いてため息をつく。

「王様っていつもこれを着てるの？」

「人前に出る時だけだ」

「良かった。いや、良くないけど」

それからセダントはくるくると回ってみた。どの方向から見てもやはり似合っていない。

「お前、自分の名前を言えるか？」

「セダントだよ」

「いや、その少年はもういないことになっている。お前はウェリオン・ナダーシュ・ウルラクだ」

「なんだって？」

「ウェリオン・ナダーシュ・ウルラク」

「ウェリオンナダーシュウルラク？　どんな綴りを書くの？」

「あたしは字が読めないし書けない。他の者に聞いてほしい」
「そっか」

家名だけでなく、父名も名乗るのは国内において王だけだった。農民では家名を名乗ることもない。少なからず家名に憧れがあったセダントはその名前を口にした。

「ぼくはウェリオン・ナダーシュ・ウルラクだ」

「それで良い。あたしの仕事はお前を護衛することだ。詳しい仕事内容については明日、他の者が説明する」

「それじゃあ今日は何もなくても良いの？」

「構わない。あたしはドアの前で待機しているから何かあったら呼びかけて欲しい」

ディアエルはそう言い残すと部屋から出て行った。姿は見えないが彼女が言ったとおり、ドア前で待機しているのだろっ。

セダントはベッドにおそるおそる近づいた。触るとふんわりとし

た感触が伝わる。これほどまでに柔らかくする必要があるのだろうか？ 疑問に思ったが誘惑に勝てずにそのままベッドに飛び込む。

あまりにも話がうますぎる。セダンタの本能は警鐘を鳴らしていた。ディアエルが褐色人種であることがそれを強化する。褐色人種を城内で雇うなどありえるだろうか？ 国内にいる褐色人種の多くは戦争で負けて売られた者たちだ。そういった人々は基本的に単純で安価な報酬の労働で生計を立てる。影武者の護衛の場合、情報が漏れいすれば影武者の価値はなくなる。そのような信用が大事な仕事に褐色人種が任せられることは通常ありえない。

ディアエルは信用出来る人間かもしれない。セダンタはそう判断していた。褐色人種自体には良い印象は持っていない。だが、ディアエルに悪印象は抱かなかった。率直にたずねたら答えてくれるだろうか？ 何故褐色人種が城内で重要な仕事についているのかと。

セダンタは首を振った。あまりにも失礼だ。ディアエルはしつかりした性格をしているように見えたが、セダンタと年代ぐらいだった。背もセダンタよりも小さい。少女にしては筋肉質だが、農業に従事していたセダンタなどに比べれば腕は細い。

セダンタは考えるのをやめた。こんなに良いベッドで眠れるのだ。多少のリスクなどどうでも良い。舞い込んだ幸運は物にするべきだと思う。少年はそのまま眠りについた。

カーテンの隙間からこぼれる朝日は、城内であつても農家の一室であつてもそれほど変わらなかった。セダンタは寝ぼけ眼で部屋を出る。

「早いな」

壁に背をつけて座り込んでいたディアエルが顔を上げる。銀髪は少し乱れていた。

「ずっといたのか」

「それが仕事だからな」

「寝たの？」

「何度も。そうやって少しずつ睡眠を取っている」

「へえ」

ディアエルは立ち上がった。そのままセダントを部屋へと押し戻す。セダントは何がなんだか分からないまま部屋へと戻った。

「何だよ」

「出たら駄目。お前はウエリオンだ。ウエリオンは戦争で負傷して起き上がることもままならないことになってる」

「分かった分かった。こんなことでお金がもらえるならいくらでも閉じこもってるよ」

セダントが両手をあげて降参すると同時にノックが室内に響いた。ディアエルはセダントをベッドへと押しこんで、慎重にドアを開けた。小太りの男が遠慮なしに入ってくる。薄くなりはじめた頭髪とは対照的に立派な口髭をたやしていた。どことなく愛嬌を感じさせる丸顔だった。年は三十代後半ぐらいだろうか。

「やあやあ。君が影武者か。わたしはヤーヘックだ」

「セダントです」

ヤーヘックの求めに応じてセダントは握手した。

「急いでいくつかの出来事を覚えてもらう必要があるんだ。出来るかな？」

「はあ」

「まず、君は戦争を視察していた。敵の奇襲部隊に襲われたが、勇敢にも立ち向かい敵を撃退した。だが、撤退際に敵の放った矢が君の馬を射ぬいた。君は落馬して頭を強く打った。今も意識は朦朧としていて上手く話せない。それに話そうとするつもりもない。怪我をしたことで君はひどくイライラしている。OK？」

「そういう振りをすれば良いんですね」

「その通り。分からないことを尋ねられたらヒステリーを起こせば良い」

「ぼくがそんなことをしたら陛下の印象が悪くなるんじゃないかな

？」

「君が気にする必要はない。それから『ぼく』はやめるんだ。陛下はそんな言葉使いはしない」

「余とか言えば良いの？」

「そんな言葉は使ってなかった。『俺』で良い。それから少し高慢ちきな振る舞いをすればなお良い」

「俺は大変嫌なやつだったのだな」

「OK。良い感じだ。包帯を持ってきた。これを巻いてベッドに寝てる。しばらくしたら何人かが面会に来る」

ディアエルに手伝ってもらいながらセダントは自身を包帯でぐるぐる巻きにした。頭だけではなく、最終的に手や足にも巻かれていた。

ヤーヘックは満足した様子でうなずき、それからさっさと退室してしまった。どのぐらいしてから来客が来るのだろうか？ セダントは尋ね忘れたことを後悔して、ベッドの上でぼうつとすることになった。

結局、客が来たのは昼ごろになってからだった。三名の客人はディアエルをいぶかしげに見つめた後、セダントのベッドへとおごそかに歩いてきた。

「陛下」

三人が礼をする。対応するべきなのだろうか？ セダントは出来る限りの間抜け面で意識が朦朧としていることをアピールした。三人の客が顔を見合わせる。

「陛下が戦場であげた武勲は耳に入っております。勇敢でいらっしやったそうで。また、このたびの……」

「お前たちは俺に安らぎを与えるつもりはないのか？」

「とんでもない！ わたくしどもはただ……」

「俺はお前たちの顔を見たくないのだ。帰るが良い」

三人はすぐすごと帰って行った。セダントはハイになっていた。これほど楽しい仕事があるだろうか？ ベッドに寝ながら威張り散

らして、それでいて報酬はたんまりだ。畑をたがやかすのが馬鹿馬鹿しくなる。

客人たちはその後にも続々とやってきた。セダンタが顔色ひとつ変えたと相手の顔も真っ青になったり真っ赤になったりした。夕方になり、客人が途絶えるとセダンタは大笑いした。

「こんなに面白いことって他にある？ ぼく、この仕事が気に入ったよ」

「そうか」

ディアエルの視線は冷たい。ようやくセダンタは冷静になった。

「いや、分かってる。最低なことをしたのは分かってるんだ」

「お前の価値観に文句をつけているわけではない」

ディアエルはそのまま廊下へと出て行った。セダンタの高揚感はいまや完全に鎮まっていた。

第1章 少年時代の終わり（3）

翌日、朝早くからヤーヘックが寝室へとやってきた。それに従うようにディアエルも部屋へと入る。セダントは目を反らした。

「やあ。寝心地はどうだった？」

「ベッドが柔らかすぎてあんまり」

「そうか。ニユースがあるんだ。あんまり良い知らせじゃない」

「どんな？」

「宰相が昼にここへ来る。彼は君が影武者であることを知っているから演技する必要はない。絶対に失礼なことはするなよ」

「分かった。その人の名前は？」

「シエルヘンナだ。今年で62歳になる。白髪で目が細い。見れば分かるはずだ。他に質問は？」

「この仕事ってどのくらいの間やれば良い？」

途端にヤーヘックの顔に警戒の色が浮かんた。

「必要な間だけだ。それはわたしが決めることじゃない」

「そうなんだ」

「もう質問はないな？」

セダントが頷く。ヤーヘックが満足した表情をすると同時にディアエルが口を挟んだ。

「その宰相はどんな用件で来る？」

「どうして護衛がそんなことを気にするんだ？」

「情報があたしの仕事に必要なからだ」

「いや、不要さ。それからその下品な言葉遣いをどうにかしろ。シエルに向かつてそんな言葉を使ったら首を飛ばされるぞ」

ヤーヘックはそう言い捨てると部屋を後にした。ディアエルは肩をすくめ、それからセダントに忠告した。

「気をつけた方が良い」

「何を？」

「ヤーヘックだ。何か隠してる。それからシエルヘンナって奴にも気をつける。ヤーヘックはそいつを恐れてる」

「誰だつて秘密にしていることくらいあるさ。シエルヘンナって人は宰相なんですよ？ ヤーヘックより偉いだろうし恐れてて当たり前なんじゃないか」

「その宰相つってのはどのくらい偉い地位なんだ？」

「ぼくにも良く分からないよ。多分、王様の次くらいだ」

「そんなに偉いやつがどうして影武者に会いに来る？」

「一応今はぼくが王様だからじゃないかな。宰相が王様の見舞いに来ないと怪しまれるじゃないか」

「そうか」

ディアエルはそう言いながらも何かを考えているようだった。それから、言葉をつづけた。

「宰相とやらが来たら機嫌を損ねないようにしろ」

「言われなくても分かってるよ」

「なら良い」

セダンタにはディアエルが神経質になっているように思えた。彼女は槍の柄を指で叩きながら黙りこんでいる。戦を前にした兵士のようなと思う。もっとも、セダンタが兵士を見たことはなかったのだが。

宰相のシエルヘンナがやってきたのは午後を少し過ぎてからだつた。ベッドでごろごろしていたセダンタは飛び起き、宰相を笑顔で迎えた。

「はじめまして。影武者をつとめているセダンタです」

「宰相のシエルヘンナだ。不都合はないか？」

「ありません」

「良いことだ。今日来たのは他でもない。明日にある会議のことだ」「会議？」

「我が国は戦時中だ。戦略の方針を決める会議を定期的に行っている。お前に明日のそれに出席して欲しい」

セダントは胃がぼっかりとどこかへ消え去ってしまっような感覚に襲われた。

「ちょ、ちよつと待ってください。ぼくは会議なんて今まで出たことがないですよ」

「お前に発言は期待していない。適当に分かった顔をして頷いていれば良い。会議中はわたしの言葉を全て肯定しろ」

そう言ってからシエルヘンナは羊皮紙の束を差し出した。

「会議室の間取りと、席ごとに座ってる人の名前と役職をまとめた。大体で良いから覚えるんだ。人相書もある」

羊皮紙には図に加えて文字がびっしりと書きこまれている。人相書を見ても全員同じような顔をしていて良く分からない。セダントは絶望的な表情を浮かべた。

「……がんばって覚えます」

「頼んだぞ」

シエルヘンナが退室するとディアエルは不満げに目を細めた。

「あんな顔をするもんじゃない。嘘でも良いから自信があるように見せかけろ。あれでは無能だと主張しているようなものだ」

「別にどうだって良いじゃないか。シエルヘンナはぼくがただの農民だって知ってるんだから」

「そういう問題じゃない。お前にはプライドがないのか？」

「もちろんあるよ。でも、この文字量を見てよ。こんなの覚えられる訳ないじゃないか」

「あたしは文字が読めないから分からない。そんなに多いのか？」

「12人分の名前と役職だよ。顔と座席位置もある。こんなの無理だ。そもそもこれだけ多くの文字を見たのも初めてなんだ」

「全部覚える必要はないだろう。名前の分からないやつは『お前』と呼ばば良い」

「そうだけどさ……」

「役職と座席位置だけ覚えればなんとかなる。重要なのはそいつの役割だ。それに自主的に発言する必要もない。シエルヘンナが言っ

ていた通りに適当に領けば良いんだ」

「分かったよ」

セダントはもう一度羊皮紙に目を向けた。それからすぐに天井を仰いだ。

神殿への渡り廊下に足音が木霊していた。この時間になるとシエルヘンナはいつも神殿へ祈りを捧げに行く。今までその習慣をおろそかにしたことはない。年々衰えて行く体力。神殿まで歩くのもその内難しくなるに違いない。だからこそ、シエルヘンナはその習慣を大事にしていた。

渡り廊下のシエルヘンナとは反対側、神殿側からこちらへ向かう人影があった。神殿に通う人はそれほど多くない。それが誰なのか、シエルヘンナは目を細めて確認しようとする。ぼんやりとした輪郭。近づくにつれ、それは徐々にはっきりとしていき、見慣れた特徴的な体形になった。

「ヤーヘックか。珍しいじゃないか。信仰に目覚めたのか？」

「別にそういう訳じゃない」

ヤーヘックは口髭をなでつけながら顔をそらした。

「神殿に何をしに行ったんだ？」

「もちろんお祈りさ。最近全然祈ってなかったからな。たまにはしない」と

「そうか」

「シエルは影武者の子ともう会ったか？ もうこんな時間だが」

「会ったよ。どこにでもいるような農民の子だ。容姿が陛下に似ているだけでそれ以外には何もない」

「わたしが見たところ、あの護衛の女の子は頭が切れる。我々を怪しんでいるようだった。そもそも、どうして褐色人種の連中なんかを護衛にしたんだ？ 他の奴らも訝しんでる」

「少し考えればすぐに分かるだろう」

シェルヘンナは外套を翻し、神殿へと歩いて行った。残されたヤ
ーヘックはそのまましばらく立ちつくしていた。

第1章 少年時代の終わり（4）

結論から言えばセダントはほとんど何も覚えられなかった。何かを暗記しようとした経験なんてなかったし、それが必要だったこともなかった。朝の空気の中でセダントは後悔していた。会議は今日だ。手元にある羊皮紙に目を向けても頭の中にうまく入らない。

「そろそろ時間だぞ」

ディアエルは呆れ顔でセダントを見ていた。

「分かってるよ」

羊皮紙にもう一度目を通す。その動作によって情報を得ることはなかったが、それだけでセダントは満足した。羊皮紙を置いて立ちあがる。

「よし、行こう」

会議室は寝室のすぐ近くに位置していた。木製の扉が妙に威圧的に思える。セダントはドアノブに手を伸ばし、ゆっくりとそれを回した。

会議室はセダントが使っている寝室よりも少しだけ広かった。長方形を形作る辺のように机が並べられ、十三人の男たちが椅子に座っていた。上座には王のものとされる席。全員の視線がセダントに集まっている。何か言うべきなのだろうか？ 視線をシエルヘンナに向ける。彼は無表情のままだ。

余計なことはいない方がよい。セダントはそう決めて席へと座った。横のシエルヘンナの顔を窺うが、そこからは何も読み取れない。

「陛下」

そう言って一人の男が立ちあがった。年は50ぐらいか。彫りの深い顔立ちで、髪はきれいに剃られている。セダントは座席から名前を思い出そうと試みたが、おおまかな役職しか思い出せなかった。たしか軍関係の人間だ。

「何だ？」

声が震えていないことにセダントはほっとした。寝室での面会とは何もかもが違うように感じる。

「後ろの褐色人種は何者なのですか？」

全員の目がディアエルに向けられる。彼女の目が細まった。

「失礼だぞ、ハロルド。挨拶も無しにそれか」

シエルヘンナが嘲笑する。質問した男の名前はハロルドらしい。

シエルヘンナはわざと彼の名前を出してくれたのだらう。セダントは少しほっとした。

「失礼いたしました。ですが、この会議にそのような者を入れられては困ります」

「その者は陛下の護衛だ。陛下自身がお選びになった」

シエルヘンナが答える。セダントは頷くだけにとどめ、発言を見送った。

「今は護衛など必要ありません。ここににいる者たちの多くは武術の達人ですし危険など存在しない」

「陛下が良いと言っているのだ。他に無粋なことでも言わせるつもりか？」

「……いえ、失礼いたしました」

ハロルドはそう言って着席する。シエルヘンナはぐると全員を見渡し、それから演説をはじめた。

「先の会戦で我々は撤退をよぎなくされた。元々あれの目的は防衛線構築の時間稼ぎであるため、撤退には何の問題もない。ビトウー溪谷での迎撃が真の目的と言える」

「本当に迎撃出来るのかね？ もしそこで突破されたらどうなる？」
シエルヘンナの正面に座っていた男が口を挟んだ。年齢はシエルヘンナと同程度に見える。飛び出るような大きな目玉が特徴的だった。鼻は大きくつぶれている。セダントはこの特徴的な男の名前をすぐに思い出した。ネメスだ。

「突破されたら次は大橋付近で防衛する。そもそも突破はさせない」

「もしかして君は数の大小を比べられんのかね？　どちらの軍勢が多いのか分かってるのか？」

「もちろん我々ではなくツィヴェリアの方が多い。だからこそビトウー溪谷で迎撃すると言っているのだ」

「迎撃出来ないだろう？　数負けした状況では兵士の消耗率を同程度にまで抑えても防衛出来ない。子どもでも分かることだ」

「教会の要請で各国から援軍が向かってる。間に合えば十分に防衛出来るはずだ」

「間に合わなかったらどうする？」

「先ほど言ったように大橋付近で次の防衛だ。そこまで攻められたら時間稼ぎに徹するしかない。敵の補給の消耗と冬と援軍の到来を待つだけだ」

「周辺の町や村は略奪に喘ぐだろうね」

「そうなるだろうな。もつとましな案があるのならさっさと言えば良い」

「なに、確認しただけさ」

ネメスはぎよつとした目をくるくる回しながら笑った。シエルヘンナが確認するように全員を一瞥する。

「何か他に質問は？　ビトウー溪谷で迎撃することについて意見はあるか？」

ハオルドが拳手して立ちあがる。

「最初から大橋まで下がって迎撃してはどうですか？　援軍も確実に間に合いますしこちらの消耗を最小限に出来ます。敵の補給路も伸びる」

「それでは不測の事態があった時に困る。大橋よりこちらには開けた草原しかない。もし突破されたらおしまいだ。消耗は防げるだろうがリスクとは釣り合わん」

「安全のために兵を消費するべきだとお考えなのですか」

「そう表現したいならばそうだとも言える」

ハオルドは黙り込んだ。険しい表情だった。

シエルヘンナはセダントに目を向けた。

「陛下はどうお考えですか？」

全員の視線がセダントに集まる。そして、その多くが興味からもたらされたものではなく、形式的な視線であることを直感的に知ってしまった。ネメスのぎよる目は珍しく落ち着いていて、ハロルドは露骨にセダントに興味がなさそうだった。

本物のウエリオン王は無能だったのだろう。誰も王など気にとめていなかったに違いない。ただ、形式的に存在するだけで、おそらく本質的な意味での価値は無いに等しかったのだ。

セダントはその評価を払拭してみたいと思った。誰もが驚くような言葉を発したかった。だが、思考は思想に追いつかなくて、セダントは何も言えなかった。

たった10人ちよつとの名前も覚えられないような人間に何が出るだろう？ 農民出の無学な子どもに何が出来る？ そもそも、会議の内容のほとんどは理解できていない。

ゆっくりと口が開き、セダントは何も考えずに喋った。

「シエルヘンナの意見に賛成だ」

何人かの顔に失望が見えた。シエルヘンナだけが満足そうな表情をしている。

それから会議は細かい戦術についての話へと移っていった。時々、シエルヘンナがセダントに意見を求め、少年はそれに賛成した。それだけだった。話の内容にさえついていけず、自身の意見はそこに一切存在しない。本物のウエリオン王もセダントと似たようなものだったのだろうか？ あるいはもつとましかったのだろうか？ 影武者として出席したこの会議で、何人の兵士たちの運命を左右したのだろうか？ 本物が出席していればずっと良い結果になったのだろうか？ あるいは何も変わらない？ そしてもつとも悪いことは、セダントにはその結果が良いものなのか悪いものなのかさえ判断できないだろうということだった。

気がつけば会議は終わっていた。全員がセダントに一礼する。そ

ここに本物の敬意はないように思えた。セダントは一目散に会議室から飛び出ていった。

華美な寝室に戻ると全てが馬鹿らしく思える。何の価値もないような形式的な王にあてがわれた寝室。そして、今そこにいるのはその形式的な王の影武者だ。

「どうした？ 何かあったのか？」

セダントはびくつとして振りかえった。扉前でディアエルが訝しげな表情を浮かべて立っている。

「何でもない」

「そうか」

彼女はそう言つと静かに廊下へと出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5326n/>

ばくが王になったのは

2010年10月8日13時51分発行